関羽の死　―『三国志』研究ノート<3>―

上谷　浩一

緒言

本稿は 2007 年度に大阪体育大学体育学部で担当した歴史学の講義ノートに、講義では煩雑を避けて言及しなかった関連研究や史料を加筆したものである。

現在一般で広く流布している三国志関係の書籍の多くは小説（フィクションを交える）として書かれている。しかし近年、三国志の分野では、一般愛好者と専門研究者の垣根を取払った「三国志研究会」が発足するなど、読み手に阿った善悪イメージの増幅や、「もしも生きていたら」とか「こうすれば勝った」という空想歴史の物語世界では満足できないという思いが広がってきている。そしてすでに、本稿と同様に、歴史学研究に立脚した三国志の試みも登場している。

その第 1 は、『三国志考証学』（講談社、1996 年）である。中国の李殿元・李紹先の両氏による『「三国演義」中的懸案』（四川人民出版社、1993 年）を、和田武司氏が訳したもので、李殿元氏は中国古典文学、李紹先氏は魏晋南北朝史を専攻され、翻訳者の和田武司氏は中国文学者で『正史三国志英傑伝』（徳間書店、1994 年）の共著者でもある。『三国志演義』と正史『三国志』の両方に博通したスタッフの作品である。内容的にも、たとえば<趙雲が「単騎、幼主を救った」話は根拠があるのか？>という項目では、趙雲が幼い劉禅を抱いて曹操の軍陣を一人で突破したという有名なエピソードを取り上げ、どこまでが根拠のある話で、どこからが創作かを明確かつ冷静に峻別している。一般の読者が史実としての三国志を学ぶには好適であろう。

第 2 は、高島俊男氏の『三国志「人物縦横談」』（大修館書店、1994 年）である、高島氏は現在、『水滸伝』研究などで高名な中国文学者である。巻頭の史料論で正史『三国志』がいかにして『三国志演義』へと変貌を遂げていったのかを確認し、その上で曹操や関羽、諸葛孔明といった著名人だけでなく、蒯越や北宮伯玉、闕沢といった歴史研究者でも見落としがちな人物まで取り上げて紹介されている点は見事である。また同書はちくま文庫版（『三国志きらめく群像』と改題、2000 年）が出たので、学生にも薦めやすくなった。こうした質の高い「三国志」入門書の刊行については、著者だけでなく、出版元の大修館書店、筑摩書房の御見識にも深い崇敬の念を覚えるものである。

しかし、史実の上に被せられた『三国志演義』というフィルターはあまりにも分厚い。加えて三国志ブームによる創作―たとえば、先年、湖北省の長坂公園（！？）に劉禅を鎧の下に抱いた趙雲の騎馬像が建ち、さらに彩色され、観光客の増加で敵兵まで作り足された―が、その上にどんどん積み重なっている。高島氏も同書のあとがきに、次のように書かれている。

> ある出版社で三国志関係の本を何冊も手がけた人と話した時、「事実はあの本に書いてらっしゃる通りなんでしょうけどね、でも三国志ファンには受けませんよね」と言われた。三国志ファンというのは固定した人物イメージを持っているから、書き手はそれにあわせるように、すくなくともそのイメージをさかなでしないようにしなければならないんですよ、とその人は言う。たとえば諸葛孔明はかならず智謀神のごとき軍師でなければならない。だから、いやが上にも英明な人物として書き立てればいくらでも買ってくれる。

確かに歴史には書き手と読み手が存在し、その関係にはなかなか難しいものがある。特に勧善懲悪の成熟したストーリーが確立している場合は、虚構を剥ぎ取るだけでは、読み手を満足させることはできないだろう。さらにその先には何が隠れているかを明らかにして、新しい完結した構造を提示するところまでたどり着いて、初めて読み手に応えることになるのではないか。これは三国時代専攻の歴史研究者のこれからの課題であろう。

今回取り上げたのは、中国ではもはやヒーローを通り越して神に祀られてしまった関羽である。高島氏の著書でも若干のページが割かれ、その生い立ちや性格が検討されている。しかし、当時の政治情勢の中で関羽の行動とその死への歩みを見直すという作業は、人物談という執筆目的のために省かれている。それを補うことで、あらためて見えてくる関羽の人物像を考えたい。

Ⅰ　関羽のプロフィール

関羽について、正史『三国志』が伝える情報は実はわずかしかない。内陸の塩の産地として有名な河東郡の解県出身であったこと。それから、本来の字は長生であったのを雲長に変えたこと。そして、「亡命」という表現から何か犯罪やトラブルを起こして涿郡に逃げてきていたこと、が推測されるくらいである。『三国志演義』の名場面である「桃園の盟」の逸話も、ＮＢＡの姚明選手に匹敵する９尺（約 220 センチ）というその超人的な体躯―ちなみにアントニオ猪木氏は 190 センチで、関羽はさらに二回りほども大きいことになる！―も記述されていないのである。

この時代に人物評価の重要な基準であった先祖の家系も同様である。死亡した時の年齢

すらわからないので、生年も明らかにできない。劉備（生年は161年）と同世代と考えられ、後世、清代に書かれた『関帝志』や各種の地元の伝承が後漢桓帝の延熹3年（160）誕生と述べるのも大きくは外れていないだろうが、その年に同定する根拠は見当たらない。

逆に記録がないことから推理できることもある。たとえば、父祖の記録が皆無であるのは、彼が劉備の下に集った「少年」（社会のアウトロー）たちの一人に過ぎなかったと判断する材料となる。ただ、張飛とともに特に「禦侮」、つまり親衛役にしたという表現が使われ、青年時代の劉備の挫折続きの人生にずっと付き合って、寝食を共にしてくれた（貧困を耐え忍んでくれた）というのだから、その他大勢の「少年」たちとはレベルが異なる結びつきがあったのだろう。「桃園の盟」に描かれたような場面は、劉備の旗揚げ段階で現実に存在したのではないか。

また、ここまでわからないとなると、関羽・張飛というコンビの名が「羽」―「飛」と妙に対応していることにも注意すべきかもしれない。伝承でも元は別の姓名（馮賢？）で、悪徳商人を誅して逃亡する道中で関所の役人に誰何され、そこでとっさに「関羽」を思いついたというが、ちなみに変名は魏の名将の張遼の伝にも見える。よく見ると張飛の字の「益徳」は、劉備の「玄徳」から1文字もらったようでもあり、劉備に従うようになった時にそろって改名したのかもしれない。

記録がないことについて少し補足すれば、正史『三国志』の著者の陳寿（233－297年）は益州巴西郡安漢県の人で、劉璋と劉備・劉禅の2代に仕えた譙周の弟子である。譙周は諸葛亮や蔣琬によって学者として優遇され、さらに劉禅が皇太子劉璇（母は張皇后―張飛の娘―の侍女）を立てると、その僕や家令となった。陳寿自らも觀閣令史（『晋書』本伝）、衛将軍主簿、東觀祕書郎、散騎黄門侍郎（『華陽国志』陳寿伝）といった、中央の記録文書や関係者に近い場所で勤務していた。とすれば、関羽についての情報は譙周の周辺や中央の記録文書から知ることができたはずである。にもかかわらずこれほど情報が欠落しているのは、関羽自身や周囲が口をつぐんだか、上述の何かのトラブルも含めて、詳しく記録しないほうがよいと陳寿が判断したのかのいずれかであろう。そうなると、なおさらトラブルに関係しない体躯の記事がないことが意味を持つ。もし本当に9尺もあれば周囲の印象に強く残り、『三国志』の編纂でも特筆されただろう。つまり、それほどの巨躯ではなかったのである。

Ⅱ　関羽の役回り

小説ではいつも並んで登場する関羽と張飛であるが、劉備との関係を見ると、そこには明らかな違いが存在している。

劉備は一時、曹操に属したが反逆して徐州刺史の車冑を殺害し、曹操に攻撃されて袁紹の下に逃走した。その時に劉備は予州の沛県（小沛）におり、関羽は南東に100キロほど離

れた徐州の下邳に陣取っていたために取り残され、曹操に投降することになった。後に荊州で曹操に追撃された時も、関羽は水軍を任されて別行動をしている。赤壁の戦いの勝利で荊州中南部を手に入れた劉備は、本拠を公安（南郡対岸）に置き、張飛は宜都郡（南郡西隣）や南郡の太守にし、関羽は同じ太守でも北に200キロほど離れた、最前線の襄陽郡に充てた。続いて劉備が益州奪取に向かった時も、張飛は援軍として呼び出されたが、関羽は荊州に残された。

この違いがどこから来たのかについてはさまざまな理由が考えられるが、根本的には関羽が張飛よりも指揮・判断の能力が高く、単独で作戦運営ができたということであろう。言い換えれば独立心が強いということでもある。荊州に残った時には「董督荊州事」と表現されている。陳寿があえて「董」をつけて強調しているのは、形だけの監督責任者ではなく、本当にすっかり任せていたという意味なのではないか。

彼は歴史書『春秋』を愛読していたと伝えられる。劉備の横に立って怖い顔で睨みをきかせる剛勇の武人という既存のイメージに囚われず、相応の知識もあって冷静にてきぱきと指示を出していく作戦指揮官というイメージに切り替えたほうが、より実像に近づけるのではないか。ちなみに、二人と並び称される趙雲は、遅れて単身で劉備に帰属したので独立部隊を任されておらず、劉備直属の親衛隊の指揮官であったようである。

ただ、既成のイメージに背を向けるあまり、文弱な行政官と考えるのも極端に過ぎる。曹操に従うことになった関羽は官渡の戦いで先鋒を任され、『三国志演義』では袁紹側の大将であった顔良と文醜の兄弟を討ち取ったとされている。二人はどちらも袁紹軍の勇将として『三国志』荀彧伝に登場する実在の人物である。そして文醜とは無関係なようであるが、顔良を倒したことは本伝に明記される事実である。ここで少し推理を加えれば、文醜という名前は実名とは考えにくい。当時、并州で活動していた黒山賊の頭目たちは張飛燕（身軽）、李大目（ギョロ目）、張雷公（デカ声）、左髭丈八（長ヒゲ）など身体的特徴で呼ばれているから、同様に顔良と文醜というのも「イケメン」や「タトゥー」という仇名であり、兄弟というのも義兄弟のようなものだったのではないか。そして二人は士大夫というよりも黒山賊と同様な民間武装集団につながるタイプの人物だったのだろう。とすれば、顔良は諸葛亮のような作戦統括役とは異なり、相応の実戦経験と格闘能力を備えていたことになる。その顔良を倒したのだから、関羽もまた優れた武術の使い手であったことが立証される。そしてそうだからこそ、関羽自身も武勇伝として周囲に繰り返し述べ聞かせ、記録にも残されたのだろう。

もう一つ、関羽の豪傑ぶりを示すエピソードとして、左臂の矢傷が化膿したので医師に「切開して骨を削らないといけない」と言われたので、宴会で平然と飲食談笑しながら手術させたという話がある。これは到底真実とは思えないだけでなく、本人が自慢げに口にするにはやや誇張が過ぎる。おそらくは、彼の親しい部下たちが亡き大将の思い出（おそらく酒席での話のネタ）として語り伝えたものではないか。

Ⅲ　関羽の北征

『三国志』の本伝や蔣濟伝、呂蒙伝などによれば、関羽は劉備が荊州を占拠すると元勲として重んじられ、襄陽太守・蕩寇将軍とされ、漢江の北で活動した。さらに劉備が益州に出陣すると、上述のように荊州の守りを一任された。そのまま建安24年（219）に劉備が漢中王となると前将軍となり、攻勢に出て曹仁を樊に包囲した。曹操は于禁を救援に派遣したが、秋の大雨で漢水が溢れ、魏の七軍は水没し、于禁も降伏した。かくして梁、郟、陸渾（いずれも洛陽の南60キロの県）の群盗には関羽の配下に入って活動する者も現れ、その威勢は洛陽周辺をも動揺させたという。

そこで曹操が鋭鋒を避けるために献帝を許昌から移すこと（おそらく250キロ北の冀州の鄴県へ）を議論させると、司馬懿と蔣濟が関羽の成功を孫権は望んでいないから、孫権の征伐をやめ、協力させて関羽の背後を襲わせれば、樊の包囲は放っておいても解けると献策し、それが採用された。当時、南郡太守の糜芳や公安を守る士仁と関羽はうまくいっておらず、閏十月、孫権が呂蒙に侵攻させると二人は誘いに応じて降伏した。一方、曹操は徐晃に曹仁を救援させ、関羽は勝てずに撤退することにしたが、すでに本拠地の江陵は孫権に押えられ部下たちの妻子も捕らえられていた。それを知った関羽の軍は四散し、遂に彼は子の関平とともに臨沮で孫権の部将に殺されてしまった。

こうした本筋の話に加えて、孫権の配下の呂蒙や陸遜の巧妙かつ精緻な策略（「謙下の策」）や、そして追い詰められた関羽の救援要請を冷たく拒否した劉封、孟達など、『三国志演義』が語る数々のエピソードを加えれば、小説でおなじみの、奮闘むなしく敗れた悲劇の将軍という物語が完成する。

しかし、それだけの話だったのだろうか。

これで事実は語りつくされているのだろうか。

実は『三国志』を細かく見ていくと、彼の敗北の周囲には、いくつもの見落とされてきた事柄が存在するのである。先ず、関羽は襄陽太守となったとはいえ、襄陽や隣接する樊、南陽の荊州北部は曹操側の支配下にあった。それどころか、『三国志』楽進伝には「後に荊州の平定に従軍し、襄陽に駐屯して関羽や蘇非らを攻撃し、敗走させたので、南郡に属する諸県や周囲の異民族たちは楽進の下に降伏してきた。また劉備が任命した臨沮県、施陽県などの長官たちも撃破した」とある。建安16年に劉備が益州攻略作戦で主な武将や軍団を根こそぎ動員したため、「董督荊州事」の関羽は本拠地の南郡（荊州中部、治所は江陵）まで脅かされていたのである。加えて、孫権が荊州の返還を強硬に要求し、建安20年には実力行使に出て南部の長沙・零陵・桂陽の3郡を奪われた。外交交渉で荊州中部と零陵郡は何とか確保したが、関羽にとっては、非常な苦境と後退の日々が続いた。

ところが状況は一変する。建安18年に西の涼州で馬超が挙兵し、長安を越えて潼関（洛陽まで200キロ）に迫り、さらに漢中郡（益州北部）の張魯が曹操に降伏したので、劉備が

法正らを率いて攻め込み、曹操も援軍を繰り出して激しい漢中争奪戦が起きた。また東の楊州でも孫権が攻勢を示したので、曹操は夏侯惇を総大将とする26軍（13万人）という大軍を送り、居巣に駐屯させた（夏侯惇伝）。楽進もこちらに引き抜かれた（楽進伝）。こうして結果的に、中間の荊州の曹操軍の圧力が低下することになり、関羽は息を吹き返すことができたのである。

そして、さらに事態は変化する。建安23年の10月に南陽郡の中心である宛で反乱が起きたのである。当時荊州方面を主将として担当していたのは曹操の一族の曹仁で、軍事基地は襄陽の対岸の樊にあった。曹仁は若き日から曹操を助けて数々の功績を挙げてきた勇将である。荊州北部での戦いも幾度も経験し、江陵で呉の周瑜を防いだこともある。しかし涼州での馬超、冀州での田銀の乱の鎮圧など各地を転戦しており、その間隙をついて守将の侯音らが郡太守を捕らえ、宛を確保してしまった（『三国志』の裴注に引く『曹瞞傳』）。反乱の原因は徭役の重さで、繰り返される遠征の負担がのしかかっていたのだろう。同様な不満が近隣の郡県にもあり、関羽はそれらと連携して、漢水を遡ったのである。

ところが翌年の正月までに郡の功曹であった宗子卿の知略と、曹仁の迅速な行動で、宛の反乱はあっけなく鎮圧されてしまう（『曹瞞傳』）。しかも新しく太守となった田豫に上手に慰撫され、事態は沈静化してしまった（田豫伝）。結局、関羽は好機を活かせず、樊の曹仁（征南将軍）・襄陽の呂常の軍と正面から対峙せざるをえず、そのまま、ずるずると長期戦へ引きずり込まれてしまったのである。曹仁軍には涼州出身の猛将龐徳（元、馬超の部将）が参加していたが、そこに呂布・袁紹との戦いで戦上手の誉れが高かった于禁（左将軍）、が着陣した。さらに漢中争奪戦で劉備が勝利したために、5月に長安に撤退した曹操は手許の部隊を続々と荊州支援に振り向けた。また楊州からも満寵らが荊州に移動してきた（満寵伝）。

同年8月には于禁、龐徳を漢水の突然の洪水という自然の好機を利用して大破し、一時は樊の曹仁を孤立状態に追い込んだが、満寵が指摘するように水は程なく引いてしまった。後詰として漢中から名将の徐晃や趙儼が着陣し、その指揮下に平難将軍殷署の率いる涼州兵など、続々と精鋭部隊が加わった。さらに居巣の軍からも張遼や臧霸らが移動を開始し、兗州や豫州の州警備隊までが投入された（溫恢伝）。趙儼が「関羽も動きがとれずにいる。十日ほどで味方が到着するから、持ちこたえよう。それから一気に反撃すればきっと勝てる」（趙儼伝）と述べたとおり、形勢はじわじわと逆転し、ついに関羽は徐晃らによって打ち破られてしまった。関羽側は、包囲しながら逆に劣勢になっていくという、ちょうど西南戦争の折に熊本城で動けなくなった西郷隆盛軍のような状態になってしまったのである。

Ⅳ　関羽の不安

このような情勢にもかかわらず、関羽は劉備に援軍を求めることをしなかったし、次の

チャンスを期して潔く撤退することもしなかった。もし戦局を読んで早々に撤退しておけば、本拠地の江陵まで孫権に奪われることはなかったのである。しかも、退かずにぐずぐずしているだけでなく、曹操と孫権が提携し、江陵が陥落したことを知らされても、単身で最短距離を駆けて益州へ脱出しようとしなかった。いくたびも戦場での駆け引きを経験し、かつては曹操に投降することすら甘受してきた男が、なぜここで、かくも稚拙な振る舞いを繰り広げたのだろうか。

彼の不可解な行動は、その時に関羽が置かれていた状況を検討することで解釈していくことが可能になるだろう。これまで「董督荊州事」としての関羽の事跡は、ただ北征の次第のみで語られてきたが、全体を見通せば苦境と失敗の連続であった。楽進に大敗し、孫権にやすやすと3郡を奪われ、侯音らの反乱の支援に失敗した。さらに南郡城内で失火が起こり軍需物資を焼くなど（呂蒙伝の裴注に引く『呉録』）、部下の士気の低下も起きていた。小説などで描かれてきた、泰然として魏呉両国を睥睨威圧するという雰囲気ではなかったのである。

部下の士気が上がらなかった理由も想像がつく。荊州から益州へと劉備集団の本拠地が移動し、そこで選抜された人材が益州の中央政府の重職に栄転していた。逆に荊州に残った者は、苦境と後退の日々の中で、これまでの本社勤務から閉鎖間際の地方支社に左遷されたような気分を味わっていたのである。しかもそこに見える顔ぶれは、糜芳や士仁といった劉備の古参の家臣、言い換えれば遠い過去に必要とされた人材である。

糜芳は兄の糜竺とともに徐州時代の劉備を支え、彭城相として集団の最高幹部に列していた（糜芳伝）。ところが新たに諸葛亮や法正らを中心として組織された政権には加えてもらえず、南郡太守として荊州に残された。士仁の詳細は不明だが、幽州広陽郡出身なので（楊戯伝）、劉備の挙兵時からの側近であった可能性が高い。くわえて、方詩銘『三国人物散論』（上海古籍出版社、2000年）は二人が誘いに応じたことの「陰誘」という表記に注目し、同じく投降した荊州出身の潘濬が仲介役ではないかと推理されている。潘濬も劉備が荊州牧の時には侍中従事として政権の中枢にいたが、益州には同行できず、関羽の下で荊州の事務総括役にされた。過去にスポットライトを浴びた記憶があるだけに、そして益州と荊州が離れていただけに、彼らの疎外感は大きかっただろう。荊州の地方官にされ関羽に下僚扱いをされることに、納得がいかなかったのではないか。

当時の劉備政権の構成を見ると、益州占拠の時点で

> 諸葛亮が顧問、法正がプランナー、関羽・張飛・馬超を武力とたのみ、許靖・糜竺・簡雍が相談役、董和・黄權・李嚴ら前政権（劉焉・劉璋）の人材や呉壹・費觀ら前政権の姻戚、彭羕・劉巴のように前政権で冷遇されていた者も、すべて能力を発揮でき、有志の士はみな奮い立った。（『三国志』先主伝）

とあるが、これは益州での様子である。また、劉備の漢中王就任の推薦文では

> 平西将軍都亭侯馬超、左将軍長史・鎮軍将軍許靖、營司馬龐羲、議曹・従事中郎・軍

議中郎将射援、軍師将軍諸葛亮、蕩寇将軍・漢壽亭侯関羽、征虜将軍・新亭侯張飛、
征西将軍黄忠、鎮遠将軍賴恭、揚武将軍法正、興業将軍李嚴　（同上）

と、百二十人の署名が並んだが、関羽は5位である。しかもこの直後の人事で、前後左右の4将軍が任命されたが、前（関羽）・後（黄忠）・左（馬超）・右（張飛）と、黄忠に追いつかれた。名目上は「董督荊州事」として領域の半分を任され、№2 の地位に留まったように見えるが、実質では地位を低下していたのである。また漢中の都督には第一候補の張飛が外されて魏延が選ばれ（魏延伝）、法正は尚書令・護軍将軍として政・軍の実務を動かした（法正伝）。軍資供給の不備について関羽が処罰を宣告して出発したことが、糜芳らの思いを行動へと思い切らせたのだろうが、それがなくても、すでに荊州の崩壊は重大な水準にまで進んでいたのである。

そうした関羽に孫権が息子の縁組を求めたが、それに侮辱的な返答をしたというエピソードが記録されている。もとより同盟関係にあるとはいえ、他国との縁組を彼が勝手に受けられるはずはなく、その拒絶も徹底したものでなければ、話が益州の集団に伝わった時にどのように誤解されるかは容易に想像できよう。これは孫権の巧妙な揺さぶりであり、そして関羽の強気からは逆に彼の揺れる思いを、われわれはうかがいとるべきであろう。

V　さらに募る不安

しかも、北征に出て曹仁と対峙していた、ちょうど同じ時に、漢中で法正が劉備の軍師として活躍し、さらに荊州出身で年長ではあるが新参の黄忠（討虜将軍）が大将格の夏侯淵を斬って漢中奪取を確定的にするという大殊勲を挙げてしまったのである。夏侯淵は曹操の旗揚げ以来の重臣で、妻同士が姉妹でもあり、非常な信任を受けてきた。劉備にとっての関羽や張飛に匹敵する。漢中平定では行都護将軍として張郃や徐晃らを指揮し、その後は征西将軍として益州の劉備に備えていた。（夏侯淵伝）。建安 24 年の正月に劉備軍が走馬谷に放火したので、小部隊を連れてあわてて駆けつける途中で不意に黄忠と遭遇したので、アクシデントといってもいいような最期であった。曹操が自ら出陣したが劉備側は守りを固めて長期戦に持ち込み、不利を悟った曹操は潔く引き上げた。その時に「劉備だけではこんな作戦を取れなかっただろう」と言い残したという（法正伝）。作戦を統括した軍師法正はますます劉備に重用されることになったのである。

こうなると、関羽も、何か大手柄を挙げて自らの地位を守らなければならない。そのための北征であったのに、ずるずると長期戦へ引きずり込まれてしまった。相手側が増強されているから援軍が欲しいところであるが、もしも益州の劉備のもとにそれを求めれば、敵の涼州人部隊を撹乱するために馬超が送り込まれてくる可能性が高い。あるいは決戦と判断されれば、劉備とともに法正や黄忠まで乗り込んできて、指揮権を失うかもしれない。これでは勝利したとしても彼らの評価が高まるだけで、逆効果になってしまう。しかも馬

超だけでなく黄忠にまで追いつかれた前将軍の人事は、包囲の陣中に届いた。説得されて納得した（費詩伝）と記録にはあるものの、心をさらに揺さぶられたであろう。

あきらめて撤退すれば、それは不安な状態に再び戻り、劉備の下での特別な立場を手放すことに直結するから、これだけは論外である。不利な形勢であるのに援軍も求めず撤退もしなかったことに、「ぐずぐず」とか「稚拙な振る舞い」といった否定的な表現を用いてきたが、関羽にはこの戦いで、自力で曹操側の支配する北部荊州を奪取し、夏侯淵と同格で、かつて馬超を破ったこともある大将格の曹仁を討ち取ることしか選択肢がなかったのである。

追い詰められた関羽はくりかえし劉封、孟達に援軍を求めた（劉封伝）。明らかに格下の彼らになら手柄をあげられてもいいと考えたのではないかと想像するが、申し出を拒否され、逆に自らの地位の確実な低下を冷酷に突きつけられることになってしまった。

かつて曹操に降伏してでもしぶとく生き抜いた時のような気力は、もはや彼には残っていなかったであろう。まっすぐに益州に走れなかったのは、当然のことと言うべきである。

おわりに

かくして関羽は荊州で孤立と苛立ちを感じながら無理な作戦を続け、敗北への深みへと追い込まれていったのである。

そうした関羽の孤独に気づき、心を砕いたのが諸葛亮である。彼は馬超の加入に神経を尖らせた関羽に「おひげ様の超人ぶりに匹敵するなんてとんでもないです」と、諧謔を交えた私信を送った。それを見た関羽は大喜びし、周囲にも見せびらかしたという。これまでの『三国志』研究ではこの話を関羽の自尊心の高さという前提の下に解釈してきたので、「おひげ様」という表現は軽く読み飛ばされてきた。しかし関羽の心の中の苛立ちや集団の主流から零れ落ちていくことへ寂寥感を考えれば、親愛の情を添える「おひげ様」という言葉の含蓄は深い。ここではこの言葉が絶対に必要不可欠であろう。

我々は、小説の中の虚像にすぎない超人関羽の脆い人間としての内面や、天才戦略家ではなく人間観察力にずば抜けた諸葛亮に、そろそろ目を向けてもいいのではないだろうか。

補記：本稿執筆中の本年（2008）7月4日に、かねてから療養中であった父を見送ることになりました。私に三国志の世界への扉を開いてくれたことへの感謝を込め、本稿を捧げたいと思います。

『三国志・蜀書』巻6　関羽伝　原文

―【　】内の数字は本文の各章に対応する―

【Ⅰ】【Ⅱ】關羽字雲長、本字長生、河東解人也。亡命奔涿郡。先主於鄉里合徒眾、而羽與張飛為之禦侮。先主為平原相、以羽、飛為別部司馬、分統部曲。先主與二人寢則同床、恩若兄弟。而稠人廣坐、侍立終日、隨先主周旋、不避艱險。先主之襲殺徐州刺史車冑、使羽守下邳城、行太守事、而身還小沛。建安五年、曹公東征、先主奔袁紹。曹公禽羽以歸、拜為偏將軍、禮之甚厚。紹遣大將（軍）顏良攻東郡太守劉延於白馬、曹公使張遼及羽為先鋒擊之。羽望見良麾蓋、策馬刺良於萬眾之中、斬其首還、紹諸將莫能當者、遂解白馬圍。曹公即表封羽為漢壽亭侯。初、曹公壯羽為人、而察其心神無久留之意、謂張遼曰「卿試以情問之」。既而遼以問羽、羽歎曰「吾極知曹公待我厚、然吾受劉將軍厚恩、誓以共死、不可背之。吾終不留、吾要當立效以報曹公乃去」。遼以羽言報曹公、曹公義之。及羽殺顏良、曹公知其必去、重加賞賜。羽盡封其所賜、拜書告辭、而奔先主於袁軍。左右欲追之、曹公曰「彼各為其主、勿追也」。

【Ⅲ～Ⅴ】從先主就劉表。表卒、曹公定荊州、先主自樊將南渡江、別遣羽乘船數百艘會江陵。曹公追至當陽長阪、先主斜趣漢津、適與羽船相值、共至夏口。孫權遣兵佐先主拒曹公、曹公引軍退歸。先主收江南諸郡、乃封拜元勳、以羽為襄陽太守、蕩寇將軍、駐江北。先主西定益州、拜羽董督荊州事。羽聞馬超來降、舊非故人、羽書與諸葛亮、問「超人才可比誰類」？亮知羽護前、乃答之曰：「孟起兼資文武、雄烈過人、一世之傑、黥、彭之徒、當與益德並驅爭先、猶未及髯之絕倫逸群也。」羽美鬚髯、故亮謂之髯。羽省書大悅、以示賓客。

【Ⅱ】羽嘗為流矢所中、貫其左臂、後創雖愈、每至陰雨、骨常疼痛、醫曰：「矢鏃有毒、毒入於骨、當破臂作創、刮骨去毒、然後此患乃除耳。」羽便伸臂令醫劈之。時羽適請諸將飲食相對、臂血流離、盈於盤器、而羽割炙引酒、言笑自若。

【Ⅲ～Ⅴ】二十四年、先主為漢中王、拜羽為前將軍、假節鉞。是歲、羽率眾攻曹仁於樊。曹公遣於禁助仁。秋、大霖雨、漢水泛溢、禁所督七軍皆沒。禁降羽、羽又斬將軍龐德。梁、郟、陸渾群盜或遙受羽印號、為之支黨、羽威震華夏。曹公議徙許都以避其銳、司馬宣王、蔣濟以為關羽得志、孫權必不願也。可遣人勸權躡其後、許割江南以封權、則樊圍自解。曹公從之。先是權遣使為子索羽女、羽罵辱其使、不許婚、權大怒。又南郡太守麋芳在江陵、將軍傅士仁屯公安、素皆嫌羽輕自己。羽之出軍、芳、仁供給軍資、不悉相救、羽言「還當治之」、芳、仁鹹懷懼不安。於是權陰誘芳、仁、芳、仁使人迎權。而曹公遣徐晃救曹仁、羽不能克、引軍退還。權已據江陵、盡虜羽士眾妻子、羽軍遂散。權遣將逆擊羽、斬羽及子平於臨沮。追謚羽曰壯繆侯。子興嗣。興字安國、少有令問、丞相諸葛亮深器異之。弱冠為侍

中、中監軍、數歲卒。子統嗣、尚公主、官至虎賁中郎將。卒、無子、以興庶子彝續封。